

エコロジーと原発用語

— ドイツ語による婉曲語法とエコ言語学的アプローチ —

佐 藤 和 弘

▶ キーワード

環境意識、エコロジー、原発用語、婉曲語法

▼ 要 旨

1960年代から1970年代にかけてルール工業地帯で頻繁に発生する大気汚染が契機となり、ブランド政権は「ルール地方に青空を」運動を推進し、環境保護運動がドイツ国内に広がっていった。この運動に並行して「エコロジー」概念の新たな展開が見られた。「エコ」は接辞 *öko-* として用いられ、複合語の構成要素として多種多様な複合語を形成している。「エコロジー」の概念は1970年以降、社会言語学をはじめ、さまざまな分野で用いられるようになった。

21世紀に入りドイツのエネルギー政策は大きな転回点をむかえた。1960年以降のエネルギー政策、とりわけ原子力政策においては、*friedliche Nutzung der Kernenergie* (核エネルギーの平和的利用) に代表されるように、巧みにことばを操りながら核本来の孕む危険性を包み隠す表現が生み出されてきた。その表現技巧の中の一つとして婉曲語法がある。

Aussterben von Tieren und Pflanzen (動植物の死滅) という表現は少し注意深く見ると、我々の生存を脅かす危機的状態を適切に表現していないことがわかる。主格にあたる動植物 (*Tieren und Pflanzen*) が自ら死滅する、死に絶えるという事実のみが前面に押しやられ、その死滅の原因が何であるのかは見えない、または隠された表現形式となっている。近年、このような表現が頻繁に見られるようになっている。本論ではドイツの環境政策、原発政策における言語表現に焦点をあて、エコロジーと言語学との観点から婉曲語法による言語操作のあり方とその問題点を考察した。

はじめに

Zwei Planeten treffen sich.

Planet A: Wie geht's?

Planet B: Schlecht. Ich hab Homo sapiens.

(ein deutscher Witz ドイツのジョーク)

惑星 A の出会った時のあいさつの常套句である相手の調子をたずねる問いに対し、惑星 B は „Schlecht“ (体調はよくない) と応え、さらに „Ich hab Homo sapiens.“ と続ける。この場合下線で示した Homo sapiens (ホモ・サピエンス) は „Ich habe Kopfschmerzen / Bauchweh.“ (頭痛／腹痛がする) などのような病状を表しており、「Homo sapiens という病気を患っているからどうも体調がすぐれない」というジョークの「おち (Pointe)」になっている。

このジョークを聞くとドイツ語を母語とする人々はすぐに人間が引き起こす環境問題を連想し、少し複雑な表情をのぞかせながらも笑い飛ばすことができる。ジョークという性質上ユーモアを交えた社会批判となっているが、しかし、その内容は人類を批判したかなり辛辣なものである。ラテン語であるホモ・サピエンスはドイツ語辞典 *Duden online* (以下 *Duden* とする) の説明ではラテン語の Homo はドイツ語の Mann, Mensch に、また, sapiens は vernunftbegabt に相当し、文字どおり der vernunftbegabte Mensch であり、人間の本質は理性を有することを意味している。しかし、このジョークにも見られるように今日の人間は惑星 (地球) の健康を損ねる存在、病気の原因となっている。では、なぜドイツ人はすぐにこのジョークが環境問題を示唆していること、扱っていることに気づくのであろうか。一つの答えとして、ジョークに対する感性 (センス) と、このジョークが理解できるに足る十分な環境意識 (Umweltbewusstsein) が既に彼らの内に育っていることを指摘できるのではないだろうか。

とはいえ、このジョークをすぐに理解できるドイツ語圏の人々も世代間によって差があるようである。詳しい統計調査は現在継続中であるが、これまでの調査では70歳前後を境にすぐに直感的に理解できる層と、ジョークの「おち」がわからないままお茶を濁すような笑いを浮かべる層があることがわかった¹⁾。1960年代後半の「環境問題」を対象の一つとしたいいわゆる「新しい社会運動」²⁾以降に成長した世代とそれ以前の世代に境界が見られるかもしれない。また、学校で「環境教育」をうけた世代とそれ以前の世代の差、ということも考えられるが、これは今後のテーマとしたい。

21世紀前半はドイツのエネルギー政策において原子力政策からの撤退という大きな転回点をむかえている。ドイツでは2000年に社会民主党 (SPD) と緑の党³⁾の連立政権下で2022年までに原子力からの撤退が決定されていたが、メルケル (Angela Merkel) 首相が率いるキリスト教民主／社会同盟 (CDU/CSU) と自由民主党 (FDP) の連合政権下において原子力発電所稼働の延長が認められるなど、ドイツのエネルギー政策は大きく揺れ動いた。その根底には原子力に対する絶対的な「安全性」が最先端の技術においても保証できないことにある。しかし一方で、原子力のもたらす豊かさ、その揺るぎない技術的安全性が謳われてきた。戦後のエネルギー政策においては公害問題などに対して事実の隠蔽が多く指摘されてきたが、1960年以降のエネル

ギー政策、とりわけ原子力政策においても同様に、巧みにことばを操りながら核本来の孕む危険性を包み隠す表現を生み出すことで、原子力政策が抱える問題、事実の隠蔽が図られてきた。その表現技巧の一つとして婉曲語法がある。本論ではエコロジーと言語学との観点から婉曲語法による言語操作のあり方とその問題点を考察していく。

1. エコロジー (Ökologie) とは

1960年代から1970年代にかけてルール工業地帯で頻繁に発生する大気汚染が契機となり、ブランド (Willy Brandt) 政権は「ルール地方に青空を」運動を推進し、環境保護運動がドイツ国内に広がっていった。この運動に並行して「エコロジー」概念に新たな展開が見られる。語源辞典 *Kluge* (2002) は、エコロジーを以下のように説明している：

引用 1

Ökologie: „Lehre von den Wechselbeziehungen zwischen Organismen und ihrer Umwelt“ *erw. fach.* (19. Jh.). Neoklassische Bildung. Neubildung zu gr. *oikos* m. „Haus, Haushaltung, Wirtschaft“ und *-logie* (aber wohl eigentlich Kreuzung aus *Ökonomie* und *Biologie*). Gemeint war ursprünglich die Wirtschaftlichkeit der Naturvorgänge, doch hat sich die Blickrichtung im Laufe der Zeit ausgeweitet.¹⁻¹⁾ Das Wort erscheint zuerst bei dem deutschen Zoologen E. Haeckel 1866⁴⁾ (der angeblich frühere Beleg bei H. D. Thoreau beruht auf einem Lesefehler); die Theorie wird ausgebaut durch H. Reiter 1885 und den Dänen E. B. Warming 1895.¹⁻²⁾ Seit etwa 1970 wird das Wort zum Schlagwort der Umweltbewegung, wodurch¹⁻³⁾ *öko-* als Lehnaffixoid üblich wird (*Ökosystem* usw.). Auch als Kürzung¹⁻⁴⁾ *Öko* m. für Anhänger von Umweltbewegungen benützt.

(*Kluge* 2002: 665)

語源辞典 *Kluge* (2002) の説明にあるように、「エコロジー」(Ökologie) という用語はギリシャ語の *oikos* とドイツ語で学問を表す *-logie* を組み合わせた造語として、下線部 1-1) で述べられているように生物学者ヘッケル (Ernst Haeckel) が1866年、「生物間の、また生物と環境との相互作用」に関する学問に対して用いている。このヘッケルの造語は生物学の専門用語であったが、1世紀後の1970年代には生物学の分野を大きく超えて用いられるようになっていく。高度経済成長期に起きた公害などの社会問題を背景に、「エコロジー」は下線部 1-2) にあるように環境保護運動のスローガン (das Wort zum Schlagwort der Umweltbewegung)³⁾ となり、人間が引き起こす自然災害や人間が行う自然の搾取に対抗する運動に対し「エコロジー運動」という表現が用いられるようになった。その後、下線 1-3) に示されているように *öko-* の形で接辞としてさまざまな複合語が生まれている。*Öko* は名詞として下線部 1-4) にあるようにエコ〈環境保護〉運動支持者を示すことばとして用いられるまでになっている。このように生物学分野の専門用語であった Ökologie から *öko-* を構成要素とする多くの複合語が生まれ、さまざまな分野で用いられるようになっていく。

社会言語学の分野においては、「エコロジー」の概念は1970年に初めて用いられている。ハウ

ゲン（Einar Haugen）はこの専門用語を社会言語学・心理言語学の分野で用いている。ドイツ語圏では1980年代にフィル（Alwin Fill）が「人間と自然」「環境危機」などのテーマを旧来の言語批判に転用することなく、エコ言語学（Ökologlinguistik）の立場から言語とエコロジーの問題を検証している。

1.1. 大気汚染・水質汚染・言語汚染

ボリンジャー（Dwight Bolinger）はハウゲンとは異なった視点から言語とエコロジーのイメージを描いている。ボリンジャーは著書『*Language – the loaded weapon* 言語 – 装弾された武器』⁶⁾（1980年）において「An Ecology of Language 言語のエコロジー」と名づけられた最後の章の中で、大気汚染や水質汚染におけるエコロジー的問題と言語の「汚染」との類似性を次のように指摘している：

引用 2

Pollution. All streams carry it – water, air, light, sound, language.

汚染。すべての流れはそれを運ぶ – 水、大気、光、音、言語 (Bolinger 1980: 182)

大気汚染により夜空がかすんでしか見えないように、現実の像はすり替えられたことによりゆがめられ、真実が隠されているのである。社会言語学者としてボリンジャーはいかに言語が我々の行動と思考を決定しているか、そしてそのことにより言語が操作役としていかに濫用されうるかということを示そうとした。言語は、言語について語ることによってのみ小川が汚染される前の状態のように「純粹」になりうると、ボリンジャーは当時の言語汚染の状況に警鐘を鳴らす。

次章では言語の汚染と婉曲語法（Euphemismen）に焦点をあて、ドイツ語における生態系用語・環境用語・原発用語に見られる婉曲語法を扱いながら現在顕著に見られる言語表現の問題点を検証していく。

2. 生態系用語・環境用語・原発用語に見られる婉曲語法

2.1. 動植物：行為者を背後に退かせる構造

トランペ（Wilhelm Trampe）によると以下の表現は少し注意深く見ると、我々の生存を脅かす危機的状態を適切に表現していないという：

2-1 a) ^①Aussterben von Tieren und Pflanzen (動植物の死滅)

2-1 b) Tiere und Pflanzen ^②sterben aus. (動植物が死滅する。)

2-1 a) の下線部①の Aussterben は下線部②の分離動詞 aussterben から派生した動名詞である。aussterben は自動詞であり、主格にあたる動植物（Tieren und Pflanzen）が自ら死滅する、

死に絶えるという事実のみが前面に押しやられ、その死滅の原因が何であるのかは見え、隠されたままである。言い換えれば死滅の原因となるもの（行為者）が隠蔽される表現となっている。死滅の原因をはっきりさせるためには *aussterben* ではなく *ausrotten*（根絶する）を用いるべきである（Trampe 2001）：

- 2-2 a) ³ Ausrottung von Tieren und Pflanzen (動植物の根絶)
 2-2 b) Man ⁴ rottet Tiere und Pflanzen aus. (人が動植物を根絶する。)
 2-2 c) Tiere und Pflanzen werden ausgerottet. (動植物が根絶される。)
 2-2 d) Tiere und Pflanzen werden ⁵ von Menschen ausgerottet.
 (動植物が人間によって根絶される。)

2-2a) の下線部③の Ausrottung は下線部④の分離動詞 ausrotten から派生した動名詞である。ausrotten は他動詞であり、動作主 (Agens 主格) と被動作主 (Patens 目的格) との関連が明確となり、前記 1 a) で触れた自動詞 aussterben とは対象的に、誰かが何かを根絶するという構造がはっきりと見えてくる。2-2b) の能動文では、不定代名詞 man が動作主となり、被動作主の Tiere und Pflanzen を根絶することになるが、しかしその際、動作主として不定代名詞 man が用いられると、主語そのものが一般化されることにより、「誰」が実際の行為者なのか、が明確に表現されない構文となっている。不定代名詞 man は文の機能として漠然と人を表し、主語を明示する必要のないとき、または、明示したくないときに使用されるものである。不定代名詞 man ではなく、Mensch (人間) を用いると行為者が誰かということがはっきりとわかるが、不定代名詞 man を用いることで、本来の動作主 (行為者) が誰なのかをあいまいに表現する語法となっている。

一方、2-2c)、2-2d) は能動文である2-2b) を受動文に置き換えたものである。受動態の特徴として以下の二つがある：

- イ) 行為の受け手を前面に出す
ロ) 行為者を背後に退かせる (清野2008: 221)

イ)の説明にあるように行為の受け手が前面に出されることで、能動文におけるよりも行為の受け手に焦点が集まる。受動文である 2-2c) は能動文の被動作主(行為の受け手)の Tiere und Pflanzenが主語となっているが、ロ)の説明にあるようにこの例文では能動文での動作主にあたる行為者が示されておらず、動植物を根絶するものの姿が見えないままである。2-2d)の下線部⑤ von Menschenが示されることによって初めて根絶にいたる原因が何によるものかが明らかとなる。受動文においては、この能動文における動作主(行為者)が省略される場合が多いが、これが意図的に行われるとなると「事実を隠蔽する」という問題へとつながっていく(Fill 1993, Trampe 2001)。

受動態と同様に行為者を背後に退かせる構造として、例 2-3 a) に見られるような動詞の名詞化構造がある：

2-3a) Populationszerstörung (個体群の破壊) ← zerstören (他動詞) 破壊する

Zerstörung (破壊) は他動詞 zerstören (破壊する) から派生した名詞であるが、例 2-3a) にある Populationszerstörung (個体群の破壊) では個体群を破壊する行為者が見えないままである。すでに受動態の特徴として指摘したように行為者等が明白な場合、情報として当然わかりきったことであり、記載の必要がない場合はもちろん省略してもかまわないが、しかし、この情報の省略が意図的に行われる場合は由々しき問題である。例 2-3a) は以下の例 2-3b) のように、

2-3b) Populationszerstörung des Menschen (人間による個体群の破壊)

と、個体群の破壊をもたらす原因である „des Menschen“ (人間) を明記することで初めて行為者を前面に押し出すことができる。原因を明示する形で示せば、巧みな言語表現による隠蔽を暴くことができる。一方で、例 2-1a) に見られるように、自動詞が名詞化されることで行為の受け手のみが前面に置かれ、その原因となる行為者が文の構造上存在しないものになることができる：

2-3c) Populationsschwund (個体群の消滅)

例 2-3c) は自動詞 schwinden (消滅する) の名詞化により個体群が消滅するという事実が示されるのみである。

このように一見至極一般的な表現と思われるものに異なった角度からアプローチするとそこに隠されて見えなかったものが露呈されてくる。言い換えれば、前記 2-1a) Aussterben von Tieren und Pflanzen という言語表現に対し、動植物が死滅していく原因となる行為者が現れない表現の中に隠された真実を我々がどこまで見抜くことができるのかということが問題なのである。このような表現は緻密に練られて生まれてきたものといえよう。さらなる問題は、このような洗練された巧みな言語表現が一般に受け入れられ、人々の間で無意識の内に言語表現が内包する真実、例えば本来もつ危険性などが見えなくなっていくことである。

3. 原発用語と婉曲語法

3.1. 複合語と婉曲語法

とりわけ戦後のエネルギー政策においては事実の隠蔽が多く指摘されてきたが、以下においては、1960年以降のエネルギー政策、とりわけ原子力政策の中に見られる婉曲語法に注目する。

以下の記事は *Zeit* 新聞が1975年5月に開催されたベルリン原子炉会議の席で、当時の科学技術大臣マットフェーファー (Hans Matthöfer) が原子力発電所から出る核のごみである放射性廃棄物を処理する施設に新しい名称を用いたことを報じたものである：

引用 3

Wohin mit dem aktiven Müll?

Irgendwo in Norddeutschland soll der Entsorgungspark entstehen

³⁻¹⁾Um ein neues Schlagwort bereicherte Forschungs- und Technologieminister Matthöfer den Wortschatz der Verantwortlichen für Abfälle aus nuklearer Energie- und Erkenntnisgewinnung. ³⁻²⁾„Entsorgungspark“ nannte er auf der Berliner Reaktor-Konferenz einen geplanten Super-Komplex, der „etwa ab Mitte der nächsten Dekade irgendwo zwischen der dänischen und holländischen Grenze in küstennahen Salzstöcken radioaktives Material aufarbeiten und ³⁻³⁾die Abfallprodukte umweltfreundlich bis in eine ferne Zukunft aufnehmen soll“.

(Zeit新聞：1975年5月16日付⁷⁾)

「核ごみの行方はどこに? (Wohin mit dem aktiven Müll?)」とタイトルが付けられたこのZeit新聞の記事は下線部3-1)にあるように、1975年ベルリン原子炉会議の席で当時の科学技術大臣マットフェーファーが原子力発電所から出る核ごみ(放射性廃棄物)処理場(下線部3-2))で示されているような„Entsorgungspark“(核廃棄物処理施設)という新たな名前をつけたことを報道している。この巨大建築の複合体である放射性廃棄物処理場は、1980年代の半ば以降にオランダとデンマークの国境近くの海岸に近い岩塩岩株のどこかにおいて放射性物質を処理し、下線部3-3)に示されているように未来の先まで廃棄物を環境に優しく格納するという。DudenはこのEntsorgungsparkを次のように説明している:

3 a) Anlage für die Entsorgung 廃棄物処理施設

Dudenの説明ではEntsorgungsparkはEntsorgungsanlageの同義語とみなしていることがわかる。しかし、Entsorgungsanlageは一般ごみ(廃棄物)処理施設の意味である。この語彙からは核ごみを連想することはない。マットフェーファー科学技術大臣はこのEntsorgungを構成要素とする複合語としてEntsorgungsparkという新語を生み出した。この複合語を二つの名詞に分けると、Entsorgungは上記ですでに示したように「ごみ(廃棄物)処理」という意味である。Parkは「保管庫、集積場所」という意味もあるが、「公園」として理解されるのが一般的であろう⁸⁾。つまりマットフェーファー科学技術大臣がAnlageではなくParkを用いたのはこの語彙には緑豊かな「憩いの場」の印象を与える効果があると考えたのかもしれない。核廃棄物を処理する施設にPark、つまり「公園」というイメージが加わることにより核本来が内包する危険な姿が見えなくなり、焦点がぼやかされてしまっている。

一方、日本で出版されている独和辞典でEntsorgungsparkを調べてみると以下のように説明されている:

- | | |
|-------------------------|------------|
| 3 b) (放射性廃棄物などの) 最終貯蔵処理 | 【アクセス独和辞典】 |
| 3 c) 核廃棄物処理施設 | 【小学館独和大辞典】 |

日本語訳では放射性廃棄物や核廃棄物とあるように、どのような廃棄物を処理する施設である

かが明示されている。しかし、*Duden* には „Kern“ または „Atom“ という「核」を表す表現は説明にはなく、核廃棄物を処理する施設であることはわからないままである。その結果 *Duden* で語彙の意味を確かめても、核を扱う廃棄物処理施設本来の危険性が見えてこない。

3.2. 原発関連用語と婉曲語法

第4章以降、福島第一原子力発電所事故後に起きたドイツのエネルギー政策を扱うが、それに先立ち、その際重要キーワードとなる原発関連用語を以下 3 d) から 3 f) において見ていく。ドイツ語辞典 *Duden* と日本で出版されている独和辞典の説明を比較すると以下のようにになっている：

3 d) Restrisiko:

- (可能なかぎりの安全策を講じたあとの) 残されたリスク 【小学館独和大辞典】
- verbleibendes Risiko, das nicht ausgeschaltet werden kann (*Duden*)

Restrisiko は今日では原発関連事項において用いられるのが一般的となっている。それゆえこの用語が意味するこの「残されたリスク」は極めて危険なものであるはずだが、日独両辞典の説明からは原発事故を想定した危険性が伝わってこない。

3 e) Störfall:

- (原子力発電所の) 故障、事故 【アポロン独和辞典】
- Störung in einem Atomkraftwerk (*Duden*)

アポロン独和辞典と *Duden* は原子力発電所で起きる故障、事故とこの用語の限定的使用の仕方が示されている。一方、独和大辞典では「原子力発電所などの」、またアクセス独和辞典では「特に原子力発電所などの」というように但し書きがなされている。*Duden* の説明では下線に示されているように原子力発電所を Kernkraftwerk ではなくて Atomkraftwerk を用いている。この用語の使用のあり方に関しては次項で取り扱うこととする。

3 f) friedliche Nutzung der Kernenergie: 「核エネルギーの平和的利用」

Kernenergie:

1. Atomenergie (*Duden*)

Kernenergie は Atomenergie と同義語であるが、「核エネルギーの平和的利用」というエネルギー政策では „Atomenergie“ を用いずに „Kernenergie“ が使われている。複合語としてのこの原発関連用語の使用のあり方には婉曲語法の特徴が見られるが、この複合語の構成要素となる „Atom“ と „Kern“ に関しては同様に次項で取り扱うこととする。

3.3. 複合語の構成要素としての Kern 対 Atom

„Kern“と„Atom“を複合語の構成要素とするエネルギー政策、核に関連した用語をまとめると以下の表1のようになる。比較として対応する日本語を独和辞典から挙げると⁹⁾、KernenergieとAtomenergieを除くと日本語では„Kern“と„Atom“の表現の差がほとんど消えてしまっている。例えば Atomkraftwerk も Kernkraftwerk も日本語では「原子力発電所」であり、Kernkraftwerkに「核エネルギー発電所」という名称は与えられていない：

表 1

Kern + 名詞		Atom + 名詞	
Kernenergie	核エネルギー	Atomenergie	原子エネルギー
Kernkraft	核エネルギー、原子力	Atomkraft	原子エネルギー、核エネルギー、原子力
Kernkraftwerk	原子力発電所（略 KKW）	Atomkraftwerk	原子力発電所（略 AKW）
Kernmüll	放射性廃棄物	Atom Müll	放射性廃棄物
Kernreaktor	原子炉	Atomreaktor	原子炉
Kernbombe	原子 / 核爆弾	Atombombe	原子 / 核爆弾
Kernkrieg	核戦争	Atomkrieg	核戦争
Kernwaffe	核兵器	Atomwaffe	核兵器

表1で示されているように、KernとAtomを構成要素とする複合語においては、同義語として使用されている場合が多く見られる。しかし一方で、Atomkrieg（核戦争）に対し Kernkrieg、Atom Müll（放射性廃棄物）に対し Kernmüll、また、Atombombe（原子 / 核爆弾）に対し Kernbombe の使用頻度は極めて少ない¹⁰⁾。いずれも *Der Spiegel* 誌などで用いられていたが、一般的に使用されるまでには至らなかったようである。

ドイツ語を母語とする人にこの対置された二つの用語のイメージを尋ねると、Atomを構成要素とした複合語により強い危険性、脅威を感じるとのことである。また年齢の若い層の人たちは例えば Kernenergie という表現はもはや使わないという意見も聞かれた。

また、政党間でのこの用語の使い方を見ると、キリスト教民主／社会同盟および自由民主党は Kernenergie などの Kern を複合語の構成要素として用い、社会民主党、緑の党、左翼党（DIE LINKE）などは Atomenergie などの Atom を複合語の構成要素として使用している。このように核エネルギーを擁護する立場をとる政党は Kern との複合語を用い、反対派の政党は Atom との複合語を用いるという明確な差が見られる¹¹⁾。

前記 3f) の例ですでに触れたが、核エネルギーの平和的利用（friedliche Nutzung der Kernenergie）などのエネルギー政策では原発推進派においては原発用語として Kernenergie しか用いていない。friedliche Nutzung der Atomenergie となると Atomenergie がもつ言語的威圧感・危険性が前面に押しやられ、friedliche Nutzung とは相反するものとなり「平和的利用」との齟齬が生じてくる。それに対し Kernenergie が用いられるとその背後に潜んでいる脅威が希薄となり、危険性が包み隠される。このように洗練された、計算されつくした婉曲語法の表現

が正式に公認されたお墨付きの言語として多用されている。

日本人が「Kern 核」と「Atom 原子」を対置した際に、これらのことばから受ける印象はドイツ語を母語とする人々とは大きく異なっている。とりわけ「Atom」が「原子」ではなく「アトム」になると、年齢層にも差はあるとしても、日本人の多くがまず思い浮かべるのは「鉄腕アトム」のアトムであり、科学の子として人類の平和のために立ち向かうヒーローであり、「アトム」という言語表現には違和感よりも親近感を覚える人が多くいるのではないだろうか。また、現在の中年世代から子ども達の間にも人気のある「ドラえもん」の体内には何を食べても原子力エネルギーに変換する「原子ろ¹²⁾」が備えられており、ドラえもんの動力源は原子力エネルギーであった¹³⁾。このように日本人の日常生活の中にアニメを媒介としてアトム、原子力エネルギーというようなことばは無意識に浸透し、福島第一原子力発電所事故が起きるまではその背景にある「核」や「原子力」の孕む危険性が霞んでしまっていたのかもしれない。

4. コール元首相とドイツ・メディア：エネルギー政策と言語

2011年の福島第一原子力発電所事故後、ドイツではエネルギー政策に関して原発論争が起きた。メルケル首相は福島第一原子力発電所事故後すぐにドイツで稼働している7基の原子力発電所の一時停止（Moratorium）を決めている。この決定に対しコール（Helmut Kohl）元首相は、バーデン・ヴュルテンベルク州とラインラント・ファルツ州の総選挙を直前に控えた3月25日、ドイツの巨大大衆紙である *Bild* 新聞に「我々はなぜ核エネルギーが（まだ）必要なのか（Warum wir die Kern-Energie (noch) brauchen?)」というタイトルでメルケル首相の「原子力発電所を一時停止する」というエネルギー政策に反論する記事を投稿している¹⁴⁾。

4.1. コール元首相のエネルギー政策と婉曲語法

「数日前日本で起きた不幸な事故は我々すべての人々を唖然とさせた。（Das Unglück, das vor wenigen Tagen in Japan passiert ist, macht uns alle fassungslos.）」で始まる記事の中でコール元首相はこの不幸な事故は世界を変えるかもしれないが、「しかし、我々はこの福島で起きた事故により、エネルギー政策において現実を見つめる眼差しを逸らせてはならない。（Es darf uns aber nicht lähmen, es darf uns nicht den Blick für die Wirklichkeit verstellen.）」と警鐘を鳴らす。コール元首相は「ドイツは日本ではない。日本はドイツではない。（Deutschland ist nicht Japan. Japan ist nicht Deutschland.）」という観点から、日本で起きたことはドイツの原発事情とは異なるものであり、「ドイツの核エネルギー利用は日本の事故によって以前よりも危険性が増したということはない。（In Deutschland hat sich dadurch erst einmal und unmittelbar gar nichts verändert. Die Kernenergienutzung in Deutschland ist durch das Unglück in Japan nicht gefährlicher geworden, als sie es vorher gewesen ist.）」ということが「真実である（Wahr ist aber auch）」と述べ、日本で起きたような原発事故はドイツでは起こり得ないと主張した。さらに、「世界で最も安全な原子力発電所を有し、その技術力に対し世界中で賞賛され、敬意が払われているこの国が、慌てふためいて核エネルギーから撤退するとすれば、世界をより危険にさらすことになりかねないのである。（Im Gegenteil, wenn das Land, dessen Kernkraftwerke

zu den sichersten der Welt gehören und dessen Ingenieurskunst in der ganzen Welt bewundert und geachtet wird, überhastet ausstiege, würde dies die Welt sogar gefährlicher machen.)」と述べ、核エネルギーからの撤退はかえって世界をより危険な方向に向かわせるものであると主張する。つまり、コール元首相のドイツ市民に向けたアピールは、核エネルギーに対抗できる、信頼に足る、競争力のある、環境に優しい代替エネルギーがない限りは世界的な核エネルギーからの撤退もまたありえないことであり、「それまでは代替エネルギーのないドイツにおいては、条件つきではあるが、核エネルギーに対して、しかしはっきりとイエスである。(Bis dahin aber bleibt es für Deutschland ohne Alternative beim konditionierten, aber klaren Ja zur Kernenergie.)」とコール元首相は締めくくる。

コール元首相はこのおよそ830語からなる投稿記事の中で、以下に示しているように Kern を構成要素とする複合語を18回、タイトルを含めると19回使用している：

- Kern-Energienutzung (核エネルギー利用：2回)
- Kernenergie (核エネルギー：12回 + 1回 Kern-Energie この語形ではタイトルの中で1回のみ使用)
- Kernkraftwerke (原子力発電所：4回)

核エネルギーの必要性を主張するために、Kern を構成要素とする複合語を執拗に何度も繰り返し用いるコール元首相の強い姿勢がこの数字に現れていると言えよう。

4.2. ドイツ・メディアのエネルギー政策と言語表現：KERN(核) 対 ATOM(アトム)

コール元首相の *Bild* 新聞の投稿記事に対し *Der Spiegel* 誌や *Handelsblatt* 経済新聞、テレビニュース専門チャンネルである *n-tv* などドイツを代表する複数メディアはすぐにコール元首相の主張に対し、反論記事をこぞって掲載している。*n-tv* は「ドイツの（可能なかぎりの安全策を講じたあとの）残されたリスク：なぜ我々は（もはや）コールを必要としないのか (Deutschlands Restrisiko: Warum wir Kohl (nicht mehr) brauchen?)」というタイトルでコール元首相の原発稼働維持を主張するエネルギー政策に対し、辛辣なイロニーを交えて以下のように論駁している：

引用 4

Deutschlands Restrisiko: Warum wir Kohl (nicht mehr) brauchen.

Altbundeskanzler Kohl warnt vor einer Kehrtwende in der ⁴⁻¹⁾ Atompolitik nach der Reaktorkatastrophe in Japan. Die Rolle rückwärts sei jetzt nicht angebracht und ein schneller Ausstieg führe in eine Sackgasse. Die Welt würde noch gefährlicher. Mit Kohl hat Deutschland ein weiteres Restrisiko.
(…)

In Deutschland habe sich durch die Ereignisse in Japan „erst einmal und unmittelbar gar nichts verändert“, schreibt Kohl unter der Überschrift „Warum wir die Kern-Energie

(noch) brauchen“. Und er fügt hinzu, dass „die Kernenergienutzung in Deutschland durch das Unglück in Japan nicht gefährlicher geworden ist, als sie es vorher schon war“. Er schreibt in seinem Gastbeitrag wohlgerichtet nicht von der „Stromgewinnung aus ⁴⁻²⁾ Atomkraft“ und spricht auch nicht vom „⁴⁻³⁾ atomaren Super-Gau“ in Japan. Es ist ja nur ein Unglück – also das Gegenteil von Glück – was da in Japan geschieht und keinesfalls zur „berühmten Rolle rückwärts“ in Deutschland führen dürfe.

(*n-tv*: 2011年3月25日付¹⁵⁾)

n-tv はコール元首相の投稿記事タイトル „Warum wir die Kern-Energie (noch) brauchen“ を文字って „Deutschlands Restrisiko: Warum wir Kohl (nicht mehr) brauchen.“ というタイトルで反論記事を掲載した。この二つのタイトル中にある „die Kern-Energie“ と „Kohl“ は言葉遊びとなっている。die Kern-Energie と Kohl を同一のものとして捉え、コール元首相が「なぜ核エネルギー (die Kern-Energie) をまだ (noch) 必要とするのか」を主張するのに対し、*n-tv* は「なぜ我々はコール元首相 (Kohl) をもはや (nicht mehr) 必要としないのか」、つまり、コール元首相のような時代錯誤の古い考え方に固執するような政治家は、我々はもう必要としないと切り捨てる。脱原発・脱化石燃料を目指すドイツのエネルギー政策においては、Kernenergie も Kohl も我々はもはや必要としないという手厳しいイロニーとなっている。

核エネルギー (Kernenergie) という表現を何度も繰り返し使用し、原発稼働の維持の重要性を唱えるコール元首相の記事とドイツメディアの反論記事を比較すると¹⁶⁾、同一の事柄を言及しているのであるが、その対象を表す言語表現には以下のように顕著な差が見られる：

- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 1 a) Unglück / Super-GAU | - 1 b) atomarer Super-Gau |
| 2 a) Kernenergie | - 2 b) Atomkraft |
| 3 a) Risiko | - 3 b) atomares Risiko |
| 4 a) Kernkraftwerke | - 4 b) AKW ¹⁷⁾ |

上記 1 a) から 4 a) は、引用 4 の下線部 4-1) から 4-3) に見られるように、1 b) から 4 b) ではすべて atom を用いた言語表現に置き換えられている。同様に次の引用 5 の *Handelsblatt* 経済新聞では、コール元首相の記事の直接引用以外では „Kern“ を構成要素とする複合語が下線部 5-1) から 5-4) に見られるようにすべて „Atom“ を構成要素とする複合語に置き換えられている：

引用 5

„ROLLE RÜCKWÄRTS“

- Altkanzler Kohl rechnet mit Merkels ⁵⁻¹⁾ Anti-Atom-Kurs ab

In die Debatte um ⁵⁻²⁾ die plötzliche Atomwende von Bundeskanzlerin Angela Merkel hat sich Altkanzler Helmut Kohl (beide CDU) eingeschaltet: Mit deutlichen Worten geht er auf Distanz zu Merkels ⁵⁻³⁾ Anti-Atom-Kurs und warnt die schwarz-gelbe Bundesregierung vor einem „überhasteten Ausstieg aus der Kernenergie ohne Alternative“. In

einem Gastbeitrag für die „Bild“-Zeitung schreibt Kohl,⁵⁻⁴⁾ das Unglück im Atomkraftwerk Fukushima 1 mache zwar alle „fassungslös“, dürfe aber „nicht den Blick für die Wirklichkeit verstellen“.

(Handelsblatt: 2011年3月25日付¹⁸⁾)

前記引用4の説明1a)に見られるようにコール元首相は冒頭で、福島で起きた原発事故を数日前日本で起きた「不幸な事故」(das Unglück)とのみ表現した。コール元首相があえて原発事故という表現を避けて、投稿記事をこの文言で始めたことは極めて緻密に計算されたものと推測される。また、福島の名前を具体的に示すのではなく、「日本」という国名で事故の真相を曖昧にさせようとしているが、Handelsblatt 経済新聞は下線部5-4)にあるように das Unglück im Atomkraftwerk Fukushima 1 (福島第一原子力発電所事故)と書き換え、原発事故を前面に押し出している。Der Spiegel 誌も以下の引用6の下線部6-1)から6-3)に見られるように „Atom“ を構成要素とする複合語が „Kern“ と対象をなすように意図的に使用している：

引用6

⁶⁻¹⁾ AKW-Moratorium Altkanzler Kohl kritisiert Merkels ⁶⁻²⁾ Atomkehrwende

⁶⁻³⁾ Das Unglück im Atomkraftwerk Fukushima 1 mache alle „fassungslös“, dürfe aber „nicht den Blick für die Wirklichkeit verstellen“, schreibt Kohl.(…)

(Der Spiegel 誌: 2011年3月25日付¹⁹⁾)

Der Spiegel 誌が用いた下線部6-3)の „das Unglück im Atomkraftwerk Fukushima 1“ (福島第一原子力発電所事故) という言語表現はあくまでコール元首相の用いた表現を一部引用し書き換えたものではあるが、原発事故の真相を報道するメディアの立場としては、福島第一原子力発電所事故を単に „das Unglück“ とするのみでは真実を伝える表現からは程遠いものとなっていると言えよう。ともあれコール元首相が用いる表現は巧みに婉曲語法を用いることで核エネルギーを生み出す原子力の危険性を隠蔽しようとするものであるが、ドイツメディアはいずれもその実態を白日のもとに引き摺り出している。

4.3. 原発用語と政治

シュレーダー (Gerhard Schröder) 元首相の率いる社会民主党と緑の党の連合政権時代に決定された原発からの撤退条項に対し、2005年政権の座についたメルケル首相には原発ロビーからかなり強い圧力がかかっていた。キリスト教民主／社会同盟が自由民主党と連合政権を組むことで政権を取り戻すと政権内部でも、2022年を期限とする原発からの撤退を阻止する動きが顕著になっている。2011年3月福島第一原子力発電所事故が起きるおよそ1年前の2010年3月には核エネルギーの平和的利用を名目に原発稼働年数の延長を求める決議が行われている²⁰⁾。メルケル首相は2010年9月5日、17基の原子力発電所の稼働を延長する基本方針を決定した。しかし、福島第一原子力発電所事故が起きると前記4章で示したようにメルケル首相は3ヶ月の点検期間としてドイツにある全ての原子力発電所の一時停止を決定する。コール元首相の指摘する原子力エネルギー政策の「逆戻り (Rolle rückwärts)」が起きたのである。メルケル首相は

さらに政府諮問機関として「安全なエネルギー供給に関する倫理委員会（Ethik-Kommission Sichere Energieversorgung）」を設置し、2ヶ月近くに渡って脱原発の社会的受け入れの可能性を検証させている。この報告²¹⁾などをもとに様々な議論を経て2022年までの脱原発が6月6日に閣議決定されるまでの一連の流れの中で、原発からの撤退の理由を語るべくメルケル首相は繰り返し何度も演説を行っている。閣議決定後の2011年6月9日に行われた演説の中でメルケル首相は次のように述べている：

引用7

In Fukushima haben wir zur Kenntnis nehmen müssen, dass selbst in einem Hochtechnologieland wie Japan ⁷⁻¹⁾ die Risiken der Kernenergie nicht sicher beherrscht werden können. Wer das erkennt, muss die notwendigen Konsequenzen ziehen. Wer das erkennt, muss eine neue Bewertung vornehmen. Und deshalb sage ich es für mich, ich habe eine neue Bewertung vorgenommen. Denn ⁷⁻²⁾ das Restrisiko der Kernenergie kann nur der akzeptieren, der überzeugt ist, dass es nach menschlichem Ermessen nicht eintritt. Wenn es aber eintritt, dann sind die Folgen sowohl in räumlicher als auch in zeitlicher Dimension so verheerend, so weitreichend, dass sie die Risiken aller anderen Energieträger bei weitem übertreffen. ⁷⁻³⁾ Das Restrisiko der Kernenergie habe ich vor Fukushima akzeptiert, weil ich überzeugt war, dass es in einem Hochtechnologieland mit hohen Sicherheitsstandards nach menschlichem Ermessen nicht eintritt. Jetzt ist es eingetreten.

(2011年6月9日に行われた国会演説の一部²²⁾)

メルケル首相はこの演説の中の11行の引用部分に見られるだけでも、下線部7-1)から下線部7-3)で示されているように3度、核エネルギーの排除することのできないリスク（die Restrisiken / das Restrisiko der Kernenergie）に言及し、ドイツの原発政策からの撤退理由を、高度な技術を持つ日本において福島のような事故が起きたことにより、彼女自身がこれまで絶対に起こり得ないと確信していた「核エネルギーの排除することのできないリスク」をもはや容認することができなくなったからであると述べている。この排除できずに残されたリスクは極めて危険なものであるはずだが、Kernenergieという用語を使用するかぎり、その実態が孕む危険性は、この表現を使用する人々、また、このことばを耳にする人々の意識下においては依然としてかすんだままであると言えよう。自身が物理学者であったメルケル首相においては例えばDas Restrisiko der *Atomenergie* と言い換えた表現を用いるほうが「脅威としての核エネルギー」に対して説得力のある説明のように思えるが、かつては原発推進派であり、また当時キリスト教民主／社会同盟の党首でもあったメルケル首相の立場としてはAtomenergieの使用は決して許されず、政治的立場上Kernenergieという表現を使うしかなかったのであろう。

おわりに

これまでみてきたように、とりわけ環境分野、エネルギー政策分野などで新しい用語が生み

出される際、そこになんらかのリスクが伴う場合、実態を直接明かさないために、また本来の危険性を隠蔽するために婉曲語法が使用されることがわかった。1960年代以降の高度経済成長期の時代には、公害問題が繰り返していても関わらず、経済成長が優先された。成長拡大主義のもとにその分野の一部の専門家は極めて政治的ではあるが、問題の本質を語ることを避ける言語表現を駆使することに専念した。

21世紀に入った今日、エネルギー政策は大きな転換点をむかえている。「科学の進歩」という絶対的な、盲目的な期待を前提とした未来像の中では、1980年代にボリンジャーが指摘した「言語の汚染」と同じようなことが今日の言語表現の中にも起きているのではないだろうか。とりわけ原子力エネルギー政策について語られる時にはその傾向が強く表れているようである。原子力エネルギーを科学技術の進歩の象徴であるかのごとく、かつて人々を鼓舞させた、眩しく飾り付けられた美辞麗句はもはや通用しなくなったが、一方で巧みに姿形を変えた負のベクトルを背負った言語表現がますます息づいている。このような言語状況に対し、我々は常に感性を研ぎ澄ませて立ち向かっていかなければならないのではないだろうか。

※本稿は2018年12月8日に行われた日本独文学会京都支部秋季研究発表会の研究発表の一部を論文にしたものである。なお、研究発表要旨は Germanistik Kyoto (ゲルマニスティク 京都) 第20号47頁から52頁に記載されている。

注

- 1) 2017年7月からドイツ語母語話者を対象にインタビュー形式で行っている。
- 2) 1960年代以前は「労働者対資本案」という階級闘争に参加する労働者が多かったが、1960年代以降はベトナム戦争や女性の権利、環境問題などの社会問題のほうが重要な問題となり、参加者も労働者ばかりでなく、一般市民が多く見られるようになった。(保坂 2013: 21 参照)
- 3) 正式には90年連合 / 緑の党 (Bündnis 90 / Die Grünen) とすべきであるが、本論では一般的に使用されている「緑の党」を用いる。
- 4) 以下本論における引用中の下線はすべて筆者によるものである。
- 5) Schlagwort をフィルは Kultwort と言い換えている。
- 6) 『Language – the loaded weapon : the use and abuse of language today』(1980) 翻訳では小野塚裕視〔ほか〕訳 (1989) 『凶器としてのことば』こびあん書房がある。
- 7) <https://www.zeit.de/1975/21/wohin-mit-dem-aktiven-muell> (2020年5月10日閲覧)
- 8) *Duden* では Park が以下のように説明されている:
 1. größere [einer natürlichen Landschaft ähnliche] Anlage mit [alten] Bäumen, Sträuchern, Rasenflächen, Wegen [und Blumenrabatten]
 2. Kurzform für: Wagenpark, Maschinenpark, Fuhrpark*Duden* の説明においては Park とは1.に見られるように草花・樹木・芝生など、自然の環境をともなった公園が第1義であり、2.にある機械や乗り物の総数を示すものとしての Park は使用の限られた特殊な意味となっている。一方、Park を構成要素とする複合語 Industriepark (工業地区)、Wohnpark (住宅地区) などでは、ある施設が集合する「地区」を表すことばとなっている。
- 9) 本論参考文献に挙げた5つの独和辞典を参照。
- 10) COSMASII の出版関連資料検索結果では、Kernkrieg は1981年から1992年において4例、Kernmüll は1995年から2014年にかけて7例、また、Kernbombe に関しては、1961年から2014年において *Der Spiegel* 誌や *Die Zeit* 新聞などの使用例が見られるが、12例のみにとどまっている。(2020年5月3日閲覧)

- 11) 佐藤和弘 (2019) : 「2017年のドイツ総選挙と環境用語に関する考察」 参照。
- 12) 児童の読者層に配慮して原子炉の炉は平仮名で表記されている。本論下記注13) 参照。
- 13) 『ドラえもん』を出版している小学館は東日本大震災後、被災状況を踏まえてキャラクターの説明から「原子ろ」「原子力」の表記を削除している。
- 14) <https://www.bild.de/politik/2011/helmut-kohl/schreibt-ueber-die-atom-krise-17072266.bild.html> (2020年5月3日閲覧)
- 15) https://www.n-tv.de/politik/politik_kommentare/Warum-wir-Kohl-nicht-mehr-brauchen-article2941481.html (2020年5月3日閲覧)
- 16) コール元首相の投稿記事に関しては本論上記注15)、ドイツメディアの反論記事に関しては本論下記注19)、20) を参照。
- 17) Atomkraftwerk の略語。本論表1 参照。
- 18) <https://www.handelsblatt.com/politik/deutschland/rolle-rueckwaerts-altkanzler-kohl-rechnet-mit-merkels-anti-atom-kurs-ab/3987792-all.html> (2020年5月10日閲覧)
- 19) <http://www.spiegel.de/politik/deutschland/akw-moratorium-altkanzler-kohl-kritisiert-merkels-atomkehrtwende-a-753065.html> (2020年5月10日閲覧)
- 20) Beschluss auf der Klausurtagung des MIT-Bundesvorstands am 12./13. März 2010
https://www.mit-bund.de/sites/mit/files/dokumente/beschluesse/BuVo09.003_Kernenergie_12.03.2010.pdf (2020年5月10日閲覧)
- 21) この報告書はドイツ連邦環境省のURLを参照 : <https://www.bmu.de/download/deutschlands-energiewende-ein-gemeinschaftswerk-fuer-die-zukunft/>
- 22) <https://www.youtube.com/watch?v=sOUUMovGdEo> (2020年5月10日閲覧)

参考文献：

- Bolinger, D. (1980) : *Language The Loaded – Weapon*. London and New York. Longman.
- Crystal, D. (2000) : *Language death*. Cambridge. Cambridge University Press.
- Engel, U. (1988) : *Deutsche Grammatik*. Heidelberg. Julius Groos Verlag.
- Ethik-Kommission Sichere Energieversorgung (2011) : 『ドイツ脱原発倫理委員会報告』 吉田文和, M. Schreurs 編 訳 大月書店
- Fill, A. (1987) : *Wörter zu Pflugscharen. Versuch einer Ökologie der Sprache*. Wien & Köln. Böhlau.
- Fill, A. (1993) : *Ökolinquistik*. Tübingen. Gunter Narr Verlag.
- Fill, A., & Mühllhäusler, P. (2001) : *The ecolinguistics reader*. London u. New York. Continuum.
- Haugen, E. (1972) : The ecology of language. In: E. Haugen: *The ecology of language*. Essays by Einar Haugen. Stanford. Stanford University Press.
- 船橋晴俊, 壽福眞美 編著 (2016) : 『持続可能なエネルギー社会へ』 法政大学出版局
- Kettemann, B., & Penz, H. (eds.) (2000): *ECONstructing language, nature and society*. Tübingen. Stauffenburg Verlag.
- Makkai, A. (1993) : *Ecolinguistics*. London and New York. Pinter publishers.
- Mühllhäusler, P. (2003): *Language of Environment, Environment of Language*. London. Battlebridge press.
- Nettle, D., & Romaine S. (2000) : *Vanishing voices*. Oxford. Oxford University Press.
- Passmore, J. (1974) : 『自然に対する人間の責任』 間瀬啓允訳 岩波現代選書
- Pinnau, H. (2005) : „Umweltsprache“ im Wandel – eine ökolinquistische Betrachtung. In: *Brücke* 8 (13-23).
- Pinnau, H. (2006): Die Anthropozentrik der Sprache – aus ökolinquistischer Sicht. In: *Germanistik Kyoto Nr.7*. (75-89).
- Radkau, J., Hahn, L. (2015) : 『原子力と人間の歴史：ドイツ原子力産業の興亡と自然エネルギー』 山縣光晶, 長谷川純, 小澤彩羽訳 築地書館

佐藤和弘 (2018) : 「ドイツ語教育と環境意識の構築」『Brücke』第21号 京都外国語大学ドイツ語学科 1-13頁
佐藤和弘 (2019) : 「2017年のドイツ総選挙と環境用語に関する考察」『Brücke』第22号 京都外国語大学ドイツ語学科 17-33頁

Siebert, H. Hrsg. (1988): *Umweltschutz für Luft und Wasser*. Berlin. Springer-Verlag

篠田航一, 宮川裕章 (2016) : 『独仏「原発」二つの選択』筑摩選書0136

Schleppegrell, M. J. (2001): What makes a grammar green? In: P. Mühlhäusler: *The ecolinguistics reader*. London u. New York. Continuum. (226-228) .

Schomaker, R. (2017): *Die europäische Energiewende*. Oldenbourg. De Gruyter.

Trampe, W. (1990): *Ökologische Linguistik. Grundlagen einer ökologischen Wissenschafts- und Sprachtheorie*. Opladen. Westdeutscher Verlag.

Trampe, W. (2001): Language and ecological crisis. In: P. Mühlhäusler: *The ecolinguistics reader*. London u. New York. Continuum. (232-240) .

坪郷實 (2013) : 『脱原発とエネルギー政策の転換：ドイツの事例から』明石書店

Uekötter, F. (2007) : *Umweltgeschichte im 19. und 20. Jahrhundert*. München. Oldenbourg.

Zirnstien, G. (1996) : *Ökologie und Umwelt in der Geschichte*. Marburg. Metropolis.

Campe, J. H. (1811) : *Wörterbuch der deutschen Sprache*. Braunschweig. Schulbuchhandlung.

Kluge (2002) : *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*. Berlin / New York. Walter de Gruyter.

アポロン独和辞典 第3版 同人社 2012年

アクセス独和辞典 第3版 三修社 2010年

クラウン独和辞典 第5版 三省堂 2014年

新キャンパス独和辞典 第1版 郁文堂 2011年

独和大辞典 第2版 小学館 1998年

Duden online: <https://www.duden.de>

Spiegel online: <http://www.spiegel.de>

Das Regierungsprogramm der SPD von 1961: <http://library.fes.de/pdf-files/bibliothek/bestand/a83-02211.pdf>